

教会月報

No.525 (2022年9月25日)
【2022年10月号】
日本キリスト教団埼玉和光教会
〒351-0114 和光市本町 15-50

徒労にかける信仰

岩河敏宏

ダニエル書 3章16節～18節

16 シヤドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツアル王に答えた。「このお定めにつきまして、お答えする必要はございません。17 わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってください。18 そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません。

権力者に限らず私たちは、自身が成してきた歩みや業績を形にして残し、他者からの称賛を得たいと願います。バビロンのネブカドネツアル王も、例外ではありませんでした。

冒頭の聖句は、バビロン王であるネブカドネツアルが自分の威光を誇示するため巨大な金の像を作り、全ての者に拝むよう命令を出しました。ところが、ユダヤ人のシヤドラク、メシャク、アベド・ネゴは、「(前略)神は、その燃え盛る炉や王様の手から(中略)、必ず救ってくださいます。そうでなくとも(中略)、決していたしません」と、王(権力者)の脅しに屈することなく、王の金の像を拝むことを断固拒否する場面です。

私たちは、それぞれのタイミングで神の護りの中で歩んでいることに気付き、護って下さる神に信頼を寄せるようになります。この“神に信頼する”在り方

を、教会では“信仰”と表現します。私たちの内面には、常に個人的な欲が潜んでいます。ですから、ここに記されているネブカドネツアル王のように、力を得たいと考え、それが実現された際には総てを従わせたい、という野心が姿を現すこととなります。この野心は、程度の濃淡はありますが、人間の内には誰にでも存在します。キリスト者であっても人間である以上、この野心は潜んでいます。ですから、私個人や私たち(教会)が希望していることと、神の望んでいることが異なる場合も多々あります。ここに登場するユダヤ人である三人の青年も、窮地に遭遇した時、「必ず救ってくださいます」と先ず自身の救いを願います(個人的な希望)。しかし、その直後に「そうでなくとも(But if not;しかし、もし違っても)」と、神の主権性に委ねて、全面的に信頼する姿勢を示します。イスラエルから離され、異国の地バビロニアで生きることを強られる厳しい現実。それでも、異国の慣習や文化に感化されることなく、唯一の神への信頼を保持し続ける青年たち。これまでの苦労がここで駄目になるかも…、今までのことが徒労に終わるかもかもしれない。そうであったとしても、神の御心に掛けていく。彼らの歩みに学びたい。

聖書では印象に残る描写ですが、私たちの実生活では自身の希望が叶わないと、落胆し、失望し、神を見失います。その時こそ、再び神を仰ぎたい。